

2019年度
日本精神分析的な心理療法フォーラム第8回大会
プログラム

2019年7月6日（土）～7日7日（日）

京都文教大学

主催	日本精神分析的な心理療法フォーラム
後援	甲南大学人間科学研究所
	KIPP桃山心理オフィス
	北大阪こころのスペース
	京都文教大学心理臨床センター
	NPO 法人子どもの心理療法支援会
	(公財)関西カウンセリングセンター

2019年度 日本精神分析的心理療法フォーラム 第8回大会

ごあいさつ

平素は「日本精神分析的心理療法フォーラム」に温かなご支援をいただき、厚く御礼を申し上げます。本フォーラムも学会化し、本年、第8回大会を開催する運びとなりました。今後とも変わらぬご支援をいただきますよう、何卒よろしく願い申し上げます。

本フォーラムは、変わりゆく社会の中の様々な領域で、精神分析実践や思想が果たす役割を探索し続ける実践者や研究者の自由な討議の場として設立されました。今大会では、『関係性をめぐって』と題して、対人関係論／関係論・対象関係論・自己心理学・自我心理学といったさまざまな学派の分析家をシンポジストに、関係性について理論的・臨床的な観点から討議するシンポジウムを企画いたしました。さらに、多種多様なアプローチを持つ各学派の共通点・相違点について、臨床素材への見立てや関わり方を通して議論する分科会も企画しております。

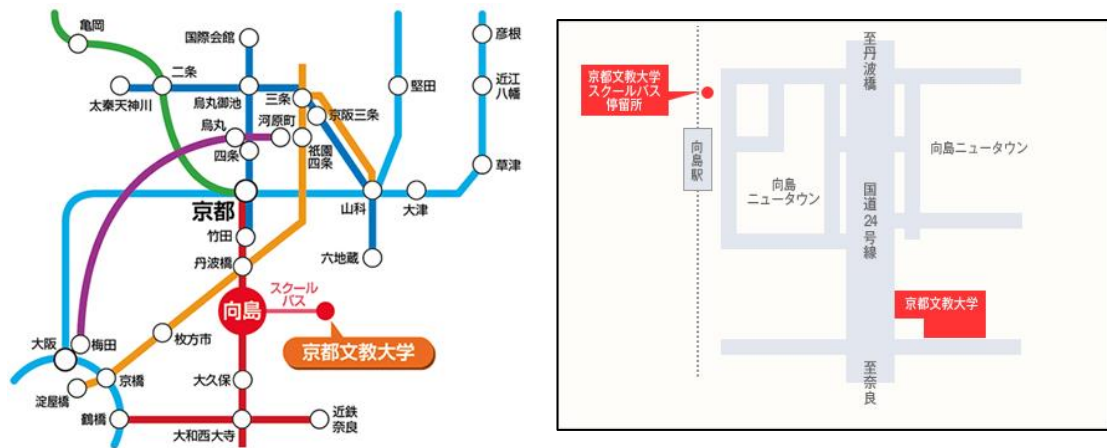
本フォーラムは、おのおの『独立 independent』した参加者が、『民主的 democratic』で『相互的 mutual』な関係のなかで討論できる場を提供することを目的としております。皆様も是非、分科会・ワークショップ・研究発表を企画していただき、積極的にご参加いただきますようお願い申し上げます。皆様との活発な対話を通じて、本フォーラムが日々の臨床実践の糧になることを祈念しております。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日本精神分析的心理療法フォーラム会長 平井正三
第8回大会 大会長 今江秀和

<日本精神分析的心理療法フォーラム 理事>

井上 祐・今江秀和・上田順一・金沢 晃・塩飽耕規・崔 炯仁・飛谷 涉
中西和紀・平井正三・広瀬 隆・宮田智基・武藤 誠・森 茂起・山下達久

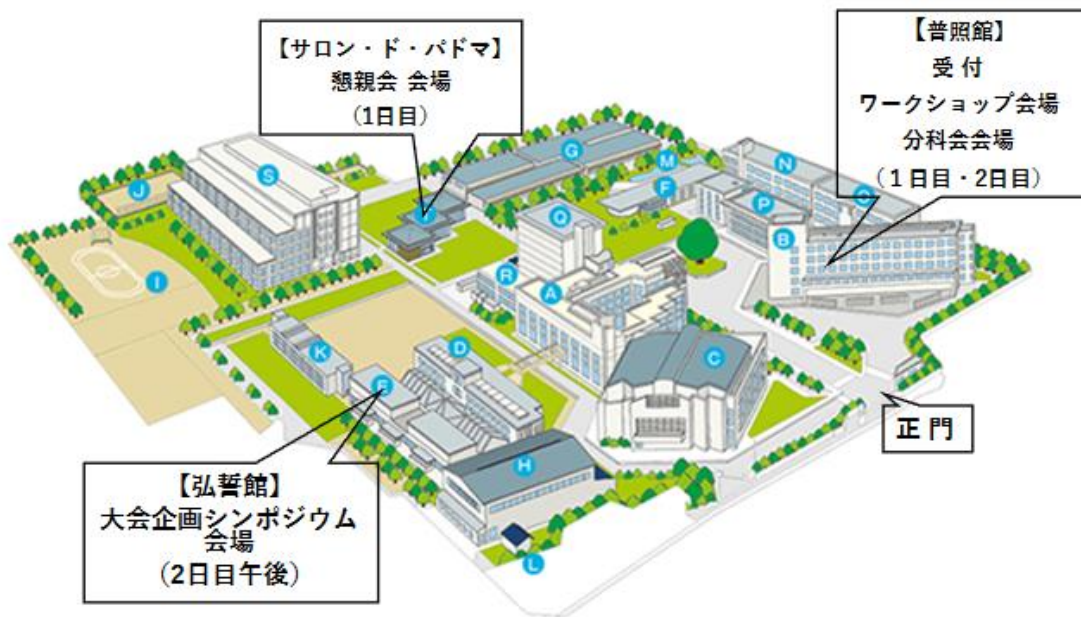
◆会場◆ 京都文教大学 京都府宇治市槇島町千足80



- *最寄り駅は、「近鉄・向島駅」です。準急・各駅停車しか止まりませんのでご注意ください。
- *向島駅～大学、大学～向島駅は、スクールバスが20分程度の間隔で運行いたします。
スクールバス時刻表の詳細は、本フォーラムのホームページ、または京都文教大学のホームページ（右記のQRコードより検索できます）をご確認下さい。
- *向島駅から会場までは、徒歩約20分です。



- *学内のコンビニ・食堂は、土曜日は営業しています。
土曜日：ファミリーマート 8:00～17:00
食堂 11:00～14:00
日曜日：いずれも営業なし



◆プログラム：7月6日（土） 10:00～12:30

大会企画WS1：F303教室	大会企画WS2：F304教室	大会企画WS3：F402教室	大会企画WS4：F404教室
子どものMBT（メンタライゼーションに基づく治療）案内 講師：菊池裕義、上地雄一郎	保育・幼児教育に活かす精神分析—物語の動機を読み取る— 講師：上田順一、森 稚葉	臨床素材としての建築—精神分析の象徴性と現象学の身体性が交わる場所— 講師：三村尚彦、塩飽耕規、大嶮清也	心理療法におけるアタッチメント—見立てと介入の勘所— 講師：工藤晋平

13:30～16:00

会員企画分科会1：F303教室	会員企画分科会2：F304教室	研究発表A：F402教室 司会者：崔 炯仁	研究発表B：F404教室 司会者：上田順一
精神分析的な視点の活用・応用—各領域でのアセスメント— 企画者：安達洋助 司会者：袴田奈津菜 発表者：久永航平 ：林 秀樹 ：西野将史 ：安達洋助 指定討論：武藤 誠	学生生活サイクルと発達—関係論的視点から— 企画者：伊藤未青 司会者：山岡亜里紗 発表者：伊藤未青 ：鈴木健一 ：野原一徳 指定討論：今江秀和 ：松本寿弥	研究発表①（45分） 新人看護師に対するワークディスカッションの実践報告—社会的防衛をワーク・スルーする— 発表者：山村 真	研究発表④（45分） 非行・犯罪事例における精神分析的な心理療法 発表者：中村大輔
		研究発表②（45分） 集団療法の場でスタッフがコンテナーとして機能することとその困難性 発表者：作井浩美	研究発表⑤（45分） NOと言える自分に出会うまで 発表者：東海林則子
		研究発表③（45分） Reflective Parenting メンタライゼーションを生かした子育て支援 発表者：ガヴィニオ重利子	研究発表⑥（45分） 外骨格の視点による地域支援者との連携について—成人のASD患者との心理療法事例から— 発表者：田村雄志

16:30～19:00

会員企画分科会3：F303教室	会員企画分科会4：F304教室	大会企画分科会：F402教室	研究発表C：F404教室 司会者：塩飽耕規
現代対象関係論の展開 企画・司会：平井三喜 ：奥田久紗子 ：浅田慎太郎 発表者：石田拓也 ：増尾德行 ：長川歩美 ：筒井亮太 指定討論：館 直彦	母と子の関係について考える—タビストック方式乳児観察の経験を通して— 企画者：大野菜純 司会者：久永航平 発表者：袴田奈津菜 ：大野菜純 指定討論：平井正三 ：森 稚葉	精神分析的な心理療法入門—さまざまな学派の共通点と相違点— 司会者：今江秀和 ：松本寿弥 シンポジスト：武藤 誠 ：宮田智基 ：中西和紀 指定討論：広瀬 隆	研究発表⑦（45分） 身体と生の感情の乱調—ラカンにおける理論とその変遷— 発表者：河野一紀
			研究発表⑧（45分） 解釈の生成における治療者の無意識のはたらき 発表者：若佐美奈子

●19時30分～ 懇親会（会場：サロン・ド・パドマ 前ページ地図参照）参加費2000円 要予約

◆プログラム：7月7日（日） 10:00～12:30

大会企画WS5：F303教室	会員企画分科会5：F402教室	会員企画分科会6：F404教室
<p>事例検討会</p> <p>司会者：武藤 誠 事例提供：伊藤未青 講師：吾妻 壮 ：館 直彦 ：飛谷 渉</p>	<p>臨床心理士指定大学院附属相談室 における精神分析的設定でのケース実践について⑤ - 『枠』や居場所の意義を改めて考える-</p> <p>企画者：藤森旭人、林 秀樹 司会者：林 秀樹 発表者：影山明音 ：熊谷迪也 ：遠藤真紀 ：山崎亮太 指定討論：石谷真一</p>	<p>精神分析的な心理療法を書くこと、そして発表すること</p> <p>企画者：上田順一 発表者：井元健太 ：人見健太郎 ：吉沢伸一 指定討論：上田順一</p>

12:40～

<p>総 会：F301教室</p> <p>会員の方はぜひご出席ください。</p>
--

13:30～17:00

<p>大会企画シンポジウム：G102教室</p> <p>『関係性をめぐって』</p> <p>企画者・司会者：横井公一 ：今江秀和</p> <p>シンポジスト：藤山直樹 ：妙木浩之 ：岡野憲一郎 ：富樫公一</p> <p>指 定 討 論：吾妻 壮</p>
--

★本フォーラムは、「臨床心理士」研修機会のワークショップ（承認番号W29201）として承認されています。

参加者の皆様には、研修証明書兼領収書を当日お渡しします。

◆大会企画シンポジウム 7月7日（日）13:30～17:00 G102教室

『関係性をめぐって』

企画者・司会者 横井公一（微風会 浜寺病院）
今江秀和（広島市立大学）

シンポジスト 藤山直樹（個人開業）
妙木浩之（南青山心理相談室／東京国際大学）
岡野憲一郎（京都大学大学院教育学研究科）
富樫公一（甲南大学）

指定討論 吾妻 壮（上智大学総合人間科学部心理学科）

【企画趣旨】

1980年代、精神分析において、関係性を重視する流れが注目されるようになってきた。こうした流れは、欲動を中心とした理論から、関係性を中心とした考え方へのパラダイム・シフトの中で、さまざまな学派の中から関係性を重視する理論家が現れてきたことによる。

関係性を中心に考える立場の主要な1つとして、関係精神分析があるが、この成立にむけた第一歩は、対人関係学派の分析家であるスティーブン・ミッチェルとジェイ・グリーンバーグが『精神分析理論における対象関係（邦訳：精神分析理論の展開）』を著したことによる。しかし、関係精神分析は、特定の創始者や特定の学派があるわけではなく、関係性を重視するという感性を共有する精神分析的理論の緩いまとまりであり、対象関係論、自己心理学、自我心理学といったさまざまな学派の関係性を重視する理論家が、学派を超えて対話を行っている。

そこで、わが国の関係性を重視する立場の分析家に、それぞれの立場から精神分析理論における関係性について、理論的、臨床的な観点から語っていただき、討論できればと考えている。

「分析実践における『関係』について考えること」

藤山直樹

のっけからこういうことを書くのもどうかと思うが、精神分析の学派的言説というものに興味がかなり薄れてきている。週6日のフルタイムの分析実践の日々のなかで、私は自分がどのような学派に属して仕事をしているかというような意識は持たない。単に精神分析らしいと自分が思う瞬間をつくりたいと考えているだけである。だからこの発表は、特定の学派に軸足を置いたものではない。単にひとりの実践している精神分析家としての発言にすぎない。

分析実践について、何か「こうしたらいい」とか「こう考えたらいい」とか考えること自体あまり気が進まない。それは畢竟後付けにすぎないからである。私はその場その場、瞬間瞬間を分析らしいできごとが生まれることに努めているだけである。

精神分析がふたりのあいだのできごとであることは当然のことである。患者が自分の本質的な部分を動かすような、そういうできごとを営むときに、もうひとりの人間である分析家のところが動かないというようなことは考えにくい。そこにおたがいのところを動かしているふたりの人間がいることは間違いないことである。

それをそこに「関係」というものがあると考えられることもできるだろう。実際、そのふたりのあいだに起きるできごとに関係性をみることに、そこに患者の側の両親と子どもの関係、あるいは内的な対象関係の持ち込みをみるのが精神分析の伝統的スタンスである。そうした持ち込みを認めた場合、患者の側の、だけでなく、分析家の側のそれらがそこに持ち込まれないという保証はない。そもそもそういうものがまるきりそこに持ち込まれないのなら、分析家の内的な準備としての訓練分析という大がかりな努力が要求される必然性はなくなるだろう。

それはさておき、精神分析というできごとで意味のある瞬間は、ふたりのあいだにある接触が生じ、何らかの情緒的な動きがそこに立ち現れる瞬間だと思う。それは、他者という自分の記憶や予測や欲望を超える何かにいよいよ触れる瞬間である。その瞬間、関係というものを想定し、そこに何かの持ち込みを想定して分析家が身構えるなら、あまりに早く、その場は何らかの反復の場として認識されることになるだろう。その瞬間のそれ自体としての意義は色あせてしまうだろう。私はそれをできるだけ遅らせたいと思う。そこで起こる、なまの接触の振動そのものを大切に、それに向き合うことで私は何か発声するだろう。それは解釈ではないかもしれない。そうした発声をしながら、そこに何かまとまりと脈絡を見出したいと沈黙のなかで格闘する私を、私は患者の前に置きたいと思う。関係性が問題にでき、解釈というものが意味を持ちうるのは、その格闘の果てのことなのだろう。

「関係性理論の起源：ラパポートグループの移動と移行について」

妙木浩之

関係論の起源には一つは H.Loewald の「治療行為」論文によって描かれた相互行為論、もう一つは Rappaport のグループのメンンガーからの移動、リッグスセンターの治療共同体、あるいはニューヨークなどの都市部の研究所のなかで育成された研究グループの仕事といった環境が背景にあるだろう。今日もニューヨークなどに、精神分析家が多く、ニューヨーク州だけに精神分析家資格が発行されているように、米国の関係論の起源に多大な影響を及ぼしてきたこの二点の確認と、後者のラパポートグループの移行的発想が、なぜまわりまわって、関係論を生み出したのかについて考察したいと思う。

歴史的な順番として Loewald の考え方に触れる必要があるだろう。彼は哲学出身だということもあるが、独自に理論的な省察を行った。「治療行為」論文は、その代表だろうが、その功績について述べるなら、以下ようになる。①人間存在のあらゆる局面において相互作用が中心であると捉えた。②対象関係の生まれながらの性質についての確信をもたらした。つまり対象と個人の相互作用におけるプロセスが内在化されるのであり、対象そのものが内在化されるわけではないと考えられる。③幼児がその心的組織を獲得する現実の環境はきわめて重要である。④複雑になり、包括的になり、前意識で使えるようになる本能的、環境的な刺激が、構造的な形で形成されることを通して達成されるなどであろう。この考えは、いくつかの視点で精神分析を刷新する可能性があったと考えられる。

Loewald の発想、そして地政学的にはメニンガーグループのリッグスへの移動がもたらした、触媒効果は、精神分析を科学として再検討する作業を可能にした。もともと Rappaport は優れた心理学者であったこともあって「科学」性に関心があり、彼自身はリッグスに移ったのち、臨床家たちの仮説検証されていない議論に辟易して実験心理学に基づいた精神分析の基礎に取り組みはじめるが、そのとたんに亡くなってしまふ。彼亡き後、その後のグループの理論的な移行は G.S.Klein や Schafer の仕事にたどることができるが、関係論への移行を助けた。この移行を典型的に表しているのは、Merton Gill だろう。彼の議論、そして共同研究者であった Hoffmann の議論は、構成主義を大幅に取り入れた、新しい精神分析の発想をもたらした。彼らの着想がハルトマン理論からの 180 度展開を可能にしたと言えるのだろう。

「心の基本形を示したホフマン」

岡野憲一郎

関係性のパラダイムが問い直しているのは、従来の精神分析理論に見られる本質主義であり、解釈主義である。そしてそれは私たちをある悩ましいジレンマに陥れる。精神分析家の役割を無意識に潜む本質的な内容の解釈として捉えることは、フロイトの創始した精神分析理論の中核にありながら、その発展を阻む可能性を有するというジレンマである。そして関係精神分析が解釈主義の代わりに提案するのは、ある種の心のやり取りを患者とともに体験することである。そのやり取りが含む関係性に関する理論は、愛着理論や間主観性理論、一部の対象関係論、フェミニズムなどと共鳴しあいながら大きな理論的な渦を形成しつつあり、もはやその動きを止めることはできない。

関係性をめぐる議論は様々な文脈を含み、とても俯瞰することは困難に思える。しかしその中でアーウィン・ホフマンの提示した理論は、様々な理論を理解するためのメタ理論としての意味合いを持つ。それは心が必然的にある種の弁証法的な動きをすることに、その健康度や創造性が存在するという見方である。

私はホフマンの提唱する、いわば心のあり方の基本形としての「弁証法的構成主義」の理論から多くを学んだが、心のあり方を公式で示すような試みはもちろん多くの反発を招きかねない。しかし同様の試みはウォーコップ・安永理論、ドイツ精神病理学の流れを汲んだ森山公夫や内沼幸雄の理論にも見られた。そもそもフロイトも数多くの心の図式化、公式化を試みたことは私たちがよく知るとおりである。

ホフマンの「弁証法的構成主義」は、実は現在の自然科学でメジャーとなりつつある複雑性理論とも深いつながりを有する。そのなかでも「揺らぎ」の概念は心の本来のあり方を巧みに捉えるとともに、ホフマンの主張を理解するうえでの助けとなるだろう。

ホフマンの理論の精神分析への貢献は、対人関係のあり方を、よりリアリティを伴った形で描写する方法を与えてくれたことである。患者と治療者は互いに相手を計り知れない他者であると同時に、自分と同じ人間すなわち内的対象として体験するという弁証法が存在する。また分析家は畏怖すべき権威者である一方で、患者と同様に弱さと死すべき運命を担った存在として弁証法的に患者に体験される運命にある。それらの弁証法の方の極がいかにか否認され、捨象されているかを知ることは、心の病理を知る上でのひとつの重要な決め手となるのである。

間主観性システム理論は、「観察者の主観的世界と被観察者のそれという、それぞれ別個にオーガナイズされた二つの主観的世界の相互作用に焦点を当てる」(Atwood & Stolorow, 1984, p.42) ような精神分析の臨床的視座・感性のことである。この考えでは、患者と治療者の主観性を、それぞれ独立して組織されているものとは理解しない。この視座の導入によって、それまで一方向一者心理学的視座に縛られていた精神分析は、双方向二者心理学的な視座を得た。

しかし、筆者の考えでは、間主観性システム理論のこのような説明は、その理論の中核的テーマをとらえたものでありながら、間主観性システム理論の持つ臨床的な豊かさや柔軟性を読み手に十分に伝えるものではない。こうした説明を始めて聞いた者の中には、間主観性システム理論以前から論じられてきた「転移-逆転移」の考え方や、対象関係論の投影同一化の議論とそれがどう違うのか、十分に理解できないと感じる者もいる。

間主観性システム理論の視座から臨床を捉えるということは、ただ、二つの主観性が影響を与え合っている治療関係を描けばよいというわけではない。治療者の体験の影響を考慮して、患者の体験を理解すればよいというわけでもない。つまり、一方の他方に対する反応や影響と、他方の一方に対する反応や影響を見るだけでは十分ではない。間主観性システム理論を支える用語には、「プロセス」「インプリシット・エクスプリシット」「文脈」「意味理解の共同作業」「intersubjective conjunction・disjunction」などがあるが、そうした言葉があるのは、それが「逆転移」という概念を超えて豊かに展開する人間関係の相互交流プロセスをとらえているからである。そうした理解が十分でないと、間主観性システム理論が、単純に一方が他方に影響を与え、他方が一方に影響を与える「転移-逆転移」の議論を超えた相互交流理論であることが理解できない。

間主観性システム理論のより深い意味を知った上で事例を記述すると、従来とは全く異なる世界が展開する。それは、私たちが臨床的な現象を豊かにとらえ、患者の創造性を飛躍させることができるフィールドである。今回の発表で筆者は、そうしたことをフロアの方々と議論するために、間主観性システム理論が導く視座を、一つの短いヴィニエットの詳細な解説を通して描いてみたい。

◆大会企画分科会 7月6日(土) 16:30~19:00 F402教室

「精神分析的な心理療法入門ーさまざまな学派の共通点と相違点ー」

司会者 今江秀和(広島市立大学)
松本寿弥(名古屋大学学生支援センター)

シンポジスト 武藤 誠(淀川キリスト教病院)
宮田智基(関西カウンセリングセンター、KIPP)
中西和紀(あいせい紀年病院、JFPSP)

指定討論 広瀬 隆(帝塚山学院大学、北大阪こころのスペース)

【企画趣旨】

心理療法には多種多様なアプローチが存在します。その中で、精神分析的アプローチを学ぶことには、どのようなアドバンテージやメリットがあるのでしょうか？そして、精神分析的アプローチの中にも、さまざまな学派が存在します。同じ精神分析の中でも、クライエント理解の仕方や関わり方には、共通点とともに多くの相違点が存在します。

今年度の大会企画分科会の目的は、精神分析諸学派の共通点と相違点を明確にすることにあります。これにより、精神分析諸学派の特徴、そして精神分析的アプローチが持つアドバンテージが浮かび上がることでしょう。そのための方法論として、今回は短い臨床素材を提示し、その見立てや関わり方について小グループでのディスカッションを行います。そして、各学派のコメンテーターからのコメントをもとに、さらに議論を深めたいと思います。

今回は臨床素材として、グレン・O・ギャバード著、『精神力動的な精神療法ー基本テキスト』より、DVD：『去り際の台詞：境界性パーソナリティ障害のクライエントとの面接場面の1コマ』を使用します。この分科会を通して、精神分析的アプローチに触れるきっかけになればと願っています。

「対象関係論の立場から」

武藤 誠

対象関係論は、心の中にあるさまざまな対象と自己とが相互に関係しながら、心という全体を形作っているという考えに基づいています。別の言い方をすると、心の中には独自の社会があり、その社会全体の力動的な営みが心を形作っているという考えです。わたしたちは、そういった心の中の世界を通して外的世界と交流しているため、外的世界の知覚は心の中の世界の影響を強く受けると考えます。

対象関係論で心を捉えた場合、精神分析は、心の中で自分が対象とどのような関係を持っているのかを知り、その外的世界への影響に気づき、そこから新たな経験へと開かれていくことを目指していると言えるでしょう。

今回、同じ素材をいくつかの学派の視点を通して見る機会が与えられました。その視座や観察の違いと共通点をはっきりとしてくることを期待します。

とくに実践においてエナクトメントは対象関係論でも重視され、セラピスト・患者双方が寄与して創出される場であると認識しますが、「患者の内的世界」がセラピストとの対人関係の中で展開されるもの、と捉える傾向があると思います。その場にいながら、そこで展開される患者の心の動きを捉えるために、逆転移感情への気づきと、その感情を保持し、意味が浮かび上がるのを待つことが技法的に重要視されます。

「対人関係学派の観点から」

宮田智基

私は、グレン・O・ギャバードの面接場面の一コマを、「対人関係学派」の観点から検討し、「共通点」と「相違点」を整理したいと思います。共通点は、**here and now**の転移・逆転移関係の重視、解離された自己状態の統合を目指すことなどがあげられます。相違点は、「ワンパーソン・モデル vs ツーパーソン・モデル」、「洞察重視 vs 体験重視」があげられるでしょう。

また、本事例では、クライアントとセラピストの行為水準の再演である「エナクトメント」が生じていますが、対人関係学派では、エナクトメントの出所はクライアントとセラピストの双方の無意識であり、双方にその寄与分があると考えます。エナクトメントは両者によって共同構築されたものであり、セラピストの寄与分を含めた形でエナクトメントを検討していこうとする姿勢が、対人関係学派にはあります。

当日は、こうした点を整理しながら、クライン派や自己心理学との共通点と相違点についてもディスカッションができればと考えています。

「自己心理学派の観点から」

中西和紀

コフトからはじまる自己心理学は、ストロウラによる間主観性システム理論の影響を強く受けながら、現代的にアレンジされ、実践されています。クライアントが有する病理と同等に、セラピストが面接プロセスに与える影響に目を向ける姿勢について呈示していきます。その際、セラピストにとって正しいと認識されているかかわりのあり方について、再検討できたらと思います。

またラックマンらによる乳児研究からの知見を、成人の面接場面に援用する視点についても呈示したいと思います。クライアントとセラピストの双方は、両者の関係や自身の感覚を調整する試みを常に行っています。通常、あまり意識されることなく行われる様々な動きを考察の対象に加えることで、クライアントおよび関係理解の一助とし、実践に反映させる点について呈示していきます。

大会企画ワークショップ1 7月6日(土) 10:00~12:30 F303教室

「子どものMBT(メンタライゼーションに基づく治療)案内」

講師: 菊池裕義(千葉県銚子児童相談所)
上地雄一郎(岡山大学)

【抄録】

メンタライジングとは、自他の行動の背景にある心理状態を理解しようとする心の働きであり、自己感覚や感情コントロール、対人関係能力など、人が人として生きる上で必要な感覚や能力の土台になるものです。MBT(Mentalization-based treatment)は、クライアントのメンタライジングの成長を促す心理療法です。

いま我が国で、MBTが注目を浴びている理由には、ふたつのことがあると思います。

ひとつめは、幼少期から虐待やネグレクトを受け続けたことで、メンタライジングの発達が妨げられ、自己感覚や対人関係に深刻な不全感を持つクライアントが増えていることです。

ふたつめは、このような外傷的育ちをもつクライアントに対する従来の治療法はコストも時間もかかり、お金のない日本では展開しづらいことです。

このようななか、時間制限式MBT-C(Time Limited Mentalization-based treatment for children)は、対象こそ子どもに限定されるものの、最短12セッション強という短期間で親子それぞれのメンタライジングの成長のきっかけを作り、あとは親子関係の良循環に委ねるといって、優れて現実的な提案をしています。

短期間で効果を期待できるのは、対象や目標を絞ったからです。MBT-Cでは、セラピストが子どもの体験のあり様を想像しながら、遊びのなかで子どもの心を知ろうとする姿勢を示すことで、あたかもセラピストの心の中に自分の心があるかのように子どもに感じてもらい、セラピストの話を価値あるものと信頼してもらい(epistemic trust)、メンタライジングの土台を作ることをめざしています。また親の子どもへのメンタライジングも併せ促進し、相乗効果をねらいます。

もちろんMBT-Cの技法は、治療関係の力動的相互作用を取り扱う最先端の力動的アプローチです。このワークショップでは、MBT-Cの基本的な原理や技法を紹介した後、我が国の児童福祉臨床でどう展開しうるかの実践例を提示します。

我が国では医療も福祉も教育も余裕がなく、公的予算の枠内で心理療法アプローチを行うには相応の工夫が必要です。このような組織の問題や訓練の問題についても触れ、みなさんと情報交換や意見交換をする時間を十分に取って、今後の本格的な導入の礎となるような議論をしていきたいと思っています。

大会企画ワークショップ2 7月6日(土) 10:00~12:30 F304教室

「保育・幼児教育に生かす精神分析—物語の動機を読み取る—」

講師：上田順一(大倉山子ども心理相談室)

森 稚葉(山梨英和大学)

【抄録】

子どもは見られたがっている

数学者岡潔は、情緒の中心が発育を支配するのではないか、とりわけ情緒を養う教育は何より大事に考えねばならないのではないか、という人間論を展開している(「春宵十話」より抜粋)。岡が着目しているのは、情操教育の大切さではなく、副交換神経系統が活動している状態、言い換えれば、遊びに没頭しているとか、何かに熱中している時の重要性である。教育の中心に情緒があるべきであるという岡の至言は、子どものこころの育ちを考える時、なるほどと思わせられるのだが、一方で、教育が集団適応の場であるとき、ある意味の矛盾が生じる。この矛盾は、志賀直哉「清兵衛と瓢箪」という短編の中で明快に描写されている。清兵衛が一生懸命に瓢箪作りに熱中している時、教員や清兵衛の親がその熱中を心配するという描写が物語っている。この物語のハイライトは、教員が清兵衛から取上げた瓢箪が高額で売買される場所であるが、子どもに関わる心の専門家として興味深いのは、瓢箪を取上げられた清兵衛が次の熱中の対象(絵を描くこと)に移っていく場面である。それは、この教員や父が - それは作者の志賀直哉がと言ってもよいのだが - 、清兵衛の行動をよく見ているということである。言い換えれば、清兵衛もおしげなく自分が没頭している姿を教員や父に晒しているのである。さらに言えば清兵衛はその没頭を見られたがっている動機があるのではないかとさえ思われる。物語では、没頭すべき次なる対象を清兵衛は見つけていくわけであるが、このことこそ清兵衛の成長と見て取れるし、広く人の心の子どもの部分をして清兵衛の行動に同一化できるのであり、子どもってそういうものだなあ、と思わせられるのである。このように考えると教育に関わらず、育ちの中心に情緒があるべきであるという至言は頷けるし、むしろその情緒について子どもに関わる人たちが見取り、考えていくことは相応の意味があると思う。

今回のワークショップでは、保育や幼児教育の現場での子どもたちと保育士や幼稚園教諭とのグループライブで生じる関係性からの情緒を、乳幼児観察でのあり方を中心として観察し、観察されたことがらをどのように考えていくかについて報告する。なお今回の2人の発表者の共通の思考プロセスの出発点は、子どもたちの「見られたがっている」という動機である。

上田順一

子どもたちの「見られたがっている」動機が、幼稚園でどのように現れるのかを素描しながら、その動機を考察してみたい。霊長類研究では、ヒトは見つめ合い、サルは見つめ合わないと言われている。乳幼児観察では、観察初期から赤ちゃんがママを(場合によっては観察者を)じっと見るというシーンが観察されることもある。これは赤ちゃん和妈妈の濃密な2人の世界でのおとぎ話のように思えるが、赤ちゃんの視線の先にママの見つめ

返す顔という受け皿を見て取る時、このシーンは、見る - 見られるという関係性の成り立ちを示している。砂場遊びに夢中になっている子どもが、ふと我にかえりママが自分を見ているかどうかを確認することはよくあることだが、子どものプレイセラピーでも、遊びに夢中になっている子どもが、ふと我にかえってセラピストに「見ててね」「見ててね」と繰り返しお願いすることがある。このように子どもたちは、生活の中で自覚なしに自分の物語をふるまいで差し出ししながら、その奥にある「見られたがっている」動機をも差し出している。この子どもたちの「見られたがっている」動機とその周辺について発表し、森および参加者とディスカッションしてみたい。

森 稚葉

子どもたちの「見られたがっている」動機と保育士や心理士たちの「見ようとする」動機が重なりあってゆく体験（あるいは、子どもと大人の動機の重なり合いの中に生まれる物語）が、保育における養護のねらいの達成、つまり子どもの生命の安全と情緒的安定を図ることにつながっていきうるのか、について、事例を通して考えていく予定である。大人との関係性の育ちが阻害され、関係性の中での安心感を体験しにくい子どもたちは（言い換えれば、アタッチメントが不安定な子どもたちは）、「見られたがっている」という動機をまっすぐ表現しにくくなるのではないだろうか。自分が見られたい姿を大人に見てもらえると信じていることができないので、大人に「見られない」こと、大人からあえて「見咎められる」ことを求めているように思える。そのような子どもたちを、どのように観察していき、その情緒をどのように考えていくことができるのか、参加者とともに考えていきたい。

大会企画ワークショップ3 7月6日(土) 10:00~12:30 F402教室

「臨床素材としての建築—精神分析の象徴性と現象学の身体性の交わるところ—」

講師：大崎晴地（芸術家）
三村尚彦（関西大学）
塩飽耕規（医療法人遊心会 にじクリニック）

【抄録】

本ワークショップは、現代芸術家の大崎晴地の作品「エアートンネル」(2010-13,写真1)と「障害の家」プロジェクト(2015-,写真2)を臨床素材とみなし、それらについて精神分析の観点と現象学の観点からそれぞれ分析するワークショップである。後半はフロアとの議論の時間をもうけ、臨床家と哲学者と芸術家との間で積極的な意見交換を行う。

「エアートンネル」(写真1)とは、8m四方の布が4枚重なった体験型の芸術作品である。中に空気を送り込むことで内部空間にゆるやかな膨らみが発生し、各層の布に空いた複数の穴の中に人が潜りこむことができる。さらにこの作品はセラピーの道具でもあり、ASDにおける感覚の感受性や身体感覚を逆手にとり、内発的な運動欲動を引き出し、行為形成および対人交流を促す装置の可能性をもっている。すでにいくつかの児童福祉施設などに試験的に導入され、好評をえている。「障害の家」プロジェクト(写真2)とは、既存の空き家を一部壊しつつ作り直した作品群で現在進行形のものである。2018年に東京にある京島の長屋を改装した作品について大崎氏は、「いわば、エアートンネルを硬くしたもの」という。本来、天井裏や床下の隠れた隙間が相互貫入するように仕立て上げられ、そこでは家と身体との関係が「規格外」からつくりなおされるような体験が起こる。これらの作品を分析する。

学としての精神分析には、映画や絵画、文学など、夢と類比的な対象とみなすことができる芸術作品について独自の概念を駆使して解釈してきた歴史がある。言語情報や視覚イメージは対象化することが比較的容易だからである。しかし本ワークショップは、触覚や身体感覚に訴えかける芸術作品を対象とする新しい試みとなっている。



(写真1)



(写真2)

大会企画ワークショップ4 7月6日(土) 10:00~12:30 F404教室

「心理療法におけるアタッチメント：見立てと介入の勘所」

講師：工藤晋平(名古屋大学)

【抄録】

ずいぶん多くの場所でアタッチメントについて言及されるようになりました。私がこの領域にかかわり始めた90年代後半には臨床の場でこれを活かそうとする動きはほとんどなかったのではないかと思います。成人の心理療法においては特にそうでした。

それから20年ほどの間に、これほどの広がりを持ってアタッチメント理論が受け入れられるようになったことは、私にとっては驚きです。なぜそれほど広く、この理論が受け入れられるようになったのでしょうか？本ワークショップの1つめのテーマは、その歴史的展望を行なうことです。アタッチメント研究には実証的蓄積の堅強さがあります。その堅強さとは何でしょうか。臨床家たちはどのようにこれを取り入れ、発展させてきたのでしょうか。そして、心理療法とアタッチメントの視点はどのような関係にあるのでしょうか。そのことを概観したいと思います。

その後で、私なりの心理療法理解について考えを進めます。それが本ワークショップの2つめのテーマです。アタッチメント理論をどのように定義するかには、いろいろな議論がありえるでしょうが、私はこれを安心感を巡る関係性の理論とするのがもっとも適切だと思っています。その視点は2つの理解から成り立っていて、1つは、ヒトは恐れを抱くと、安心感を求め、他者を頼るのだという生得的な理解です。そしてもう1つは、それが適わないがゆえに防衛的方略と関係性が確立され維持されるという発達の理解です。精神衛生上の問題はこの延長線上にあると言えます。したがって問題の中心に恐れを見えます。その視点からすると、見立ての中心には安心感の欠如を巡る関係性の理解があって、介入の中心は療法関係における安心感のケアです。私の理解では、解釈とは安心感に向かう歩みです。このことが実のところ精神分析的な心理療法と通底する視点であることを提示しながら、見立てと介入の勘所について議論してみたいと思います。

ワークショップには、アタッチメント理論とその臨床的視点の解説、および精神分析的な心理療法の解説が含まれます。見立てと介入の勘所を経験的に実感できるように、いくつかのビデオ素材を用いてみたいと思います。アタッチメントになじみのない方も精神分析的な心理療法の初学者も、ご参加いただける内容になると思います。

大会企画ワークショップ5 7月7日（日）10:00～12:30 F303教室

「事例検討会」

司会者 武藤 誠（淀川キリスト教病院）
事例提供者 伊藤未青（立命館大学学生サポートルーム）
コメンテーター 吾妻 壮（上智大学）
館 直彦（たちメンタルクリニック／大阪市立大学大学院）
飛谷 渉（大阪教育大学）

【企画趣旨】

大会企画分科会とも連動し、また、前回大会で参加者の関心が高かったことから、今大会でも一つの事例報告に対して、異なる三学派の視点から検討する機会を設けました。

関係学派（吾妻）、独立学派（館）、クライン学派（飛谷）の三学派それぞれに立脚した臨床を行なっているコメンテーターを迎え、一事例を検討します。患者の心のあり方に対する理解、治療関係やプロセスに対する理解などを通して多層的に一事例を体験することができることを期待します。

●会員企画分科会 1 : 7月6日(土) 13:30~16:00 F303 教室

「精神分析的な視点の活用・応用—各領域でのアセスメント—」

企画者 安達洋助 (認定 NPO 法人子どもの心理療法支援会)
司会者 袴田奈津菜 (河内総合病院)
発表者 久永航平 (からすま五条・やましたクリニック)
林 秀樹 (就実大学)
西野将史 (岡山市障害者更生相談所)
安達洋助 (認定 NPO 法人子どもの心理療法支援会)
指定討論 武藤 誠 (淀川キリスト教病院)

【企画趣旨】

アセスメントは難しく、常に研鑽を積むべきである。アセスメントでは、クライアントがどのような悩みを抱き、どのような援助を求めているか、どのような内的対象関係を有しているかを把握する必要がある。また、それを見立てるための情報をいかに集め、どのような目標で介入を実施できるか検討する必要がある。そして、それをクライアントや保護者、他職種にどのように説明し、協働関係を築いていくかなども考える必要がある。各領域によって現場の特徴に差異があるため、現場の集団力動、アセスメントのセッティングの仕方(時間・場の確保)、クライアントの情緒的問題の水準、介入方法(心理療法、コンサルテーション、観察など)、提供できる頻度も異なってくるだろう。

本分科会では、各領域での実践を演者が発表し、アセスメントの大事なポイントは何なのか、アセスメントの能力を上げるために何を学ぶ必要があるか、フロアの先生方と自由に検討したい。

「父性と母性のバランスに注目したアセスメント」

久永航平

子どもの悩みを抱える保護者や教員へコンサルテーションを行う際、対象児の動機的側面や時間的制約により、Th が対象児に直接介入できない事態が生じることは珍しくない。この場合、保護者や教員の話から児の心的体験を推測し、適切かつ無理のない助言をして間接的に支援する必要がある。この際、保護者や教員が児に対して、父性と母性のバランスを取りつつ関わられるよう促していくことが特に重要となるのではないかと私は考えている。

そこで私は、外部の相談員として数回、クラス担任のコンサルを行った事例を発表し、Th が父性と母性の調整弁として機能することや、父性と母性という軸でアセスメントすることの意義を検討してみたいと思う。

キーワード：教員コンサルテーション、集団力動、父性と母性

「学校現場におけるアセスメント」

林 秀樹

学校現場において実施する面接は、面接構造そのものが曖昧であり、転移や遊びの内容を精緻に検討することが難しい。限られた面接の中で、一定の理解を立ち上げることができても、児童の不応行動はクラス力動の影響を強く受けているため、集団力動に関するアセスメントも不可欠となる。しかし、時に個人と集団のアセスメントの間に解離が生じることもある。ここでは、精神分析的視点を活用してかかわった小学生のアセスメント過程を提示しながら、学校現場における支援として精神分析的視点が寄与する側面と、アセスメント過程で得られた個人の理解と集団の理解の双方をバランス良くコンサルテーションの中で取り扱う難しさについて検討したい。

キーワード：学校現場、コンサルテーション、
個人のアセスメントと集団のアセスメントのバランス

「保育園でのクラス観察を通じたアセスメント」

西野将史

本発表は、保育園年中児クラスを対象に行ったクラス観察のアセスメント経過を報告することである。担任保育士たちは集団での活動時に指示が通らない等対応に困っていた。園長は発達に問題のある子どもが半数いると述べており、クラスには発達障害の診断を受けている子も何人かいた。ただし家庭では上記の行動は見られず、保護者と共有することが難しい状況だった。私は環境等を含めた曖昧な要因が情緒的問題や集団力動に影響を与えているのではないかと思い、クラス観察と観察後毎回のフィードバックを実施した。

観察事例を通し、観察者の存在と保育士との協働関係の重要性について検討したい。

キーワード：タビストック方式乳児観察を応用したクラス観察、
観察者の存在、保育士との協働関係

「児童養護施設でのアセスメント」

安達洋助

児童養護施設に入所している子どもは、一定の安心したケアを受けられなかったことから混乱した内的世界であるが多い。アセスメントを行い、子どもにどのような援助が可能か、土台を確認し、設計図を作るための情報収集をできるかが非常に重要である。具体的には、子どもがどのような歴史を辿ってきたか（その中でどのような人と出会い、関わってきたか）、子どもがどの程度象徴的な遊びができるか、施設・職員から協力を得られるかが大きい。いかに子どもについての情報収集（施設での様子など）を行い、実際にアセスメントを実施し、そこからどのように見立て、子どもと職員と共有していきけるかを検討したい。

キーワード：生育歴、象徴性、協働関係

「学生生活サイクルと発達—関係論的視点から—」

企画者 伊藤未青 (立命館大学学生サポートルーム)
司会者 山岡亜里紗 (兵庫医科大学学生相談室)
発表者 伊藤未青 (立命館大学学生サポートルーム)
鈴木健一 (名古屋大学学生支援センター)
野原一徳 (名城大学学生相談室)
指定討論 今江秀和 (広島市立大学)
松本寿弥 (名古屋大学学生支援センター)

【企画趣旨】

Erikson (1946/2011) は自我アイデンティティについて、「自分自身の斉一性と時間の流れの中での連続性を直接に知覚すること」「自分の斉一性と連続性を他者が認めてくれているという事実を知覚すること」というふたつの意識的な感覚を含むものであるとした。Erikson にとってアイデンティティとは、自分と他者や社会との関係性において成立する。このような考え方は、対人関係学派の発達観とも近い。Sullivan (1953/1990) にとって発達とは、対人関係の場をともに構成する、他者との体験の絶え間ない展開である。

アイデンティティ概念の流れを汲む知見として、鶴田 (2001, 1994, 1995) の「学生生活サイクル」がある。「学生生活サイクル」とは大学生における入学から卒業までの時間経過に沿った心理的課題を理解する視点である。

本分科会では、精神分析的な理解のもとで大学生活の各時期に応じた発達について検討することを目的とする。個々の発表や発表間の比較検討を通じて、議論を深めたい。

伊藤未青

高校までとは違う形での適応を迫られるのが「大学入学期」である。例えば、入学前から SNS 上でつながりを持つことは普通になりつつある現在、最初に出会った仲間との関係性をどのように展開していくか、自分らしさを育てつつ、他者と適応していくことの両立の難しさに直面している学生と多く出会う。特に発達障害傾向やトラウマの影響がある場合は、自己の連続性を保つことの難しさや受身性が顕著で、自己同一性を形成する土台の弱さがある。彼らの持つ背景を理解し見立てた上でのセラピストとの関係性が、自己同一性を確立する土台を補強し、それが他者との関係性の変化につながる可能性について検討したい。

キーワード：大学入学期、適応、見立て

鈴木健一

Sullivan (1953/1990) は、児童期におけるゲームの特徴について「ゲームはゲーム仲間との間の一種の共同作業であり、また競争という要素が加わり、さらに妥協という要素も非常に大きいことが少なくない」、「ゲームというものを考えると、児童期の特殊性の発展をいちばん理解しやすい」と述べた。児童期にチャム体験のない青年期の学生が児童期的な遊びに没頭できることに価値があり、大学中間期において不適応状態にある学生の心の回復にとって有効であることが推察される。その際、セラピストとしてどのような関係の持ち方が必要であり、そこにどのような意味があるのか、検討したい。

キーワード：大学中間期、チャム、児童期の再体験

野原一徳

鶴田 (1994, 1995) による「大学卒業期」は、学部卒業か大学院修了の一年以内の時期を指す。多くの学生にとっての大学卒業は、小学校から始まった学校生活の終了を意味する。すなわち「大学卒業期」は、社会生活に向けた整理と準備が大きな心理的課題となる。この課題は、アイデンティティ (Erikson, 1946/2011) の発達にも影響を与える (杉村, 2001)。学生相談臨床でのひとつの具体的なあらわれとして、自立をめぐるテーマが考えられる。本発表では大学卒業期に面接を行なった学生の事例を提示する。そして事例の経過をもとに考察を行う。自立をめぐる親との関係性の組み替えという側面から検討したい。

キーワード：大学卒業期、親子関係、自立

「現代対象関係論の展開」

企画者・司会者	平井三喜 (たちメンタルクリニック) 奥田久紗子 (たちメンタルクリニック) 浅田慎太郎 (たちメンタルクリニック)
発表者	石田拓也 (奈良女子大学臨床心理相談センター) 増尾徳行 (ひょうごこころの医療センター) 筒井亮太 (大阪府スクールカウンセラー) 長川歩美 (A&C 中之島心理オフィス)
指定討論	館 直彦 (たちメンタルクリニック/大阪市立大学大学院)

【企画趣旨】

現代における対象関係論は、治療者と患者のあいだでどのようなことが起きているかということに関心が向きつつある。Winnicott は、主体がいきいきとした経験をもつことを「遊ぶこと」と名づけ、患者と治療者のそれが重なるところに心理療法が生じると述べた。これは、心理療法における治療者と患者という 2 つの主体の経験に着目した、極めて intersubjective な発想といえる。Winnicott の「遊ぶこと」という概念に着想を得た分析家は数多く、彼らが「遊ぶこと」という着想をどのように展開させていったかに目を向けることは、臨床に携わる現在の私たちにとって役立つだろう。中でも今回は、Bollas、Green、Ogden、Benjamin という 4 人の分析家を取りあげ、彼らが議論をどのように展開させていったかを紹介しながら、それらを臨床に照らし、理解を深める場としたい。

石田拓也

Winnicott は解釈について、非常にパラドキシカルな表現を残した。それは現代においては、治療過程における患者、そして治療者の主観的な経験を理解することの重要性として認識されている。Bollas は現代を代表する英国独立学派の臨床家の一人である。彼のオリジナルな発想の展開は、そこで使用される独特の言葉使いも相まって、私たちを魅了する。特に治療者が自身の主観を使用すること、そして如何に患者にとって外傷的でない方法で提供されるべきかについても論じている。それは Winnicott の解釈に関する理解を、さらに推し進めたものと言える。当日は、彼のオリジナルな着想にも触れながら、治療者が自身の主観を使用することについて考えたい。

キーワード：逆転移、解釈、対象としての自己

増尾徳行

Winnicott は、後継者を意図的に作らなかった。とはいえ、彼による精神分析への貢献は、多くの精神分析家・心理療法家によって、今も研究されている。なかでも Green は、独創的に思索を発展させた。Winnicott は、欲動論を対象関係論の見地から理解しようとして、さまざまな概念を生み出した。そうしてできた概念を、Green は Lacan に影響を受けた欲動論の見地から再度読み直した、と言える。その足跡は、英国対象関係論に大きな影響を及ぼしている。彼はまた、Winnicott の有名な患者を分析したことでも知られる。その治療を紹介しながら、彼による思考の一端、特に否定について考えたい。

キーワード：否定、移行現象、象徴性

長川歩美

関係精神分析は、対象関係論と対人関係論双方の恩恵をうけて近年アメリカで発展してきた。その創始者の一人である Jessica Benjamin は、Winnicott の「対象の破壊と生き残り」の概念を踏まえて、他者性がどのようにして自己に受容されるのかということについて理論を展開させている。どうすれば人間は万能的な空想を超えて、別の主体である他者と、実感をもって真に相互承認できるようになるのか。この問いに対して Benjamin は、分析の行き詰まりの相補性を打破し、生き生きとした間主体性の創造を可能にするものとして "the Third" という概念を導入している。当日は "the Third" について臨床事例を通して考えてみたい。

キーワード：間主観性、サード、相互承認

筒井亮太

精神分析臨床において、そのはじまりとなった研究を読み解くことは重要な営みである。とりわけ、Ogden は文献を精緻に読み解くことで、先達と対話し、その思索を深めていった分析家の一人である。Ogden は Bion や Lacan、Searles などの先駆者に触れているが、特に、Winnicott の書き方そのものを主題とした論考は注目に値するだろう。また、Ogden は Winnicott の「ひとりの赤ん坊などというものはいない」という着想を考察することで、分析的第三項というオリジナルの考えに至ったと述べている。本発表では、Ogden の思い入れが最も強い概念について紹介し、臨床場面でどのように使用できるのかを考えていきたい。

キーワード：雰囲気、解釈的アクション、もの思い

館 直彦

指定討論では、Winnicott、Balint、Fairbairn、Bion と対象関係論第一世代の理論が現代の対象関係論へと展開する流れを踏まえつつ、対象関係論的思考に本質的なものは一体何なのかを描き出すことを試みたい。

キーワード：対象関係論、現実の諸相、ウィニコット

「母と子の関係について考えるータビストック方式乳児観察の経験を通してー」

企画者 大野菜純 (こころのクリニック-なごみ-)
司会者 久永航平 (からすま五条・やましたクリニック)
発表者 袴田奈津菜 (河内総合病院)
大野菜純 (こころのクリニック-なごみ-)
指定討論 平井正三 (御池心理療法センター/NPO 法人子どもの心理療法支援会)
森 稚葉 (山梨英和大学)

【企画趣旨】

本分科会では、タビストック方式乳児観察の実践の報告を行う。タビストック方式乳児観察とは、赤ん坊が生まれてから満2歳を迎えるまでの2年間、同一家庭に同じ曜日の同じ時間に毎週1回の頻度で訪問し、1時間乳児とその家族を観察するものである。そして、その観察についての詳細な記録をもとに、週1回少人数のセミナーグループにおいて具体的な乳児や家庭の様子、観察者が感じていたことなどを振り返り検討を行う臨床家のためのトレーニングである。

以下に、同じ年の同じ時期に第一子として誕生したという共通点を持つ2事例を報告する。共通点がある一方で、密着し閉鎖的な世界で関係を築いた母子と風通しの良さを意識し、周囲の助けを得ながら関係を築いた母子という違いも見えてきた。それぞれの観察家庭にはどのようなことが起きていたのか理解を深めると共に、家族関係や環境の違いによってどのようなことが見えてくるのか考える機会としたい。

「カプセルの中にいる親子の観察」

袴田奈津菜

穏やかそうな夫婦の第1子として生まれたXは、誕生時、呼吸が弱いことを指摘され、数日間NICUに入っていた。家は清潔に保たれ、母子で外出している様子や人との関わりはほとんど見られず、家の中が外界から遮断された“無菌のカプセルの中”のように感じられた。また、母は見られることに敏感であり、それを受けて私は、見るべきものを見えていない感覚を強く抱くようになった。しかし、Xの身体面・精神面共に発育が進み、能動的に動くことが可能になることで、段々と母子は外に開かれていき、私も母子の交流を観察しやすくなっていった。

この2年間の中で母子が体験していたこと、そして自分の感じていた逆転移も含めて、振り返り検討したい。

キーワード：母子密着、侵入者、逆転移

「母の不在と母との再会—母子の力—」

大野菜純

Yは人懐っこい夫婦の第一子として誕生した。母の応答性は高く、安心出来る環境の中、Yは伸び伸びと過ごしていた。しかし、母は交通事故をきっかけにYに応答出来なくなった。ロボットのようにってしまった母を、Yは諦めずに求め続けた。母の体の痛みが癒えてくると共に、元の母子の関係に戻って来た。観察終了間近には、“母の不在”と“母との再会”を遊びを通して受け入れようとするYが見られた。

この2年間、発表者はYに感情移入することが多かった。母子の分離にまつわる体験を、Yがどのように体験していたのか、観察者が感じていたことも含めて振り返り検討したい。

キーワード：タビストック方式乳児観察、分離、逆転移

●会員企画分科会 5 : 7月7日(日) 10:00~12:30 F402 教室

「臨床心理士指定大学院附属相談室における精神分析的設定でのケース実践について⑤ - 『枠』や居場所の意義を改めて考える - 」

企画者 藤森旭人 (認定 NPO 法人子どもの心理療法支援会)
林 秀樹 (就実大学)
司会者 林 秀樹 (就実大学)
発表者 影山明音 (総社市教育支援センター)
熊谷迪也 (大阪経済大学大学院)
遠藤真紀 (大阪経済大学大学院)
山崎亮太 (大阪経済大学大学院)
指定討論 石谷真一 (神戸女学院大学)

【企画趣旨】

公認心理師が誕生し、心理士(師)の養成を担う大学院での訓練の質が問われつつある中、私たちはこれまで4度の分科会を設け、大学院生が担当した「精神分析的設定」による子どもや成人のアセスメントセッションを検討し、その意義を模索してきた。そこでは、「枠」が支えとなり安心感を持ちながら面接に挑めることや、中立的な態度によって逆転移を感受し、精査できる可能性が示唆されてきた。一方で「枠」を維持することが難しいケースにもしばしば遭遇する。大学院生にとって、「枠」が揺さぶられることは脅威に感じられる事態であり、その揺れ動きに耐えながらアセスメントすることは、その後のセラピープロセスを予見し得る重要な手掛かりになるように思われる。そこで今回は、「枠」や居場所が主要なテーマになっていたと思われる、大学院生が担当した4つのアセスメント事例から、「枠」の重要性について改めて検討したい。

「伝えたい気持ちが溢れてしまう小学校高学年男児とのアセスメント過程」

影山明音

本事例は、「家では話せないことを話したい」という男児Aとのアセスメント過程である。Aは発達障害の兄と幼い妹の間に挟まれ、常に心は休まらず「臨戦態勢」でいなければならなかった。Aが母親を独占できる限られた機会では、Aの伝えたい気持ちが溢れて上手く伝えられず、更に機会が減ってしまう悪循環が生じていた。また、Aの興味関心は軍艦等、周囲からは理解が得られ難く、その話しぶりからは共有体験の乏しさが感じられた。

以上の状況を鑑み、週1回の保障されたセラピーは、Aの世界を共有できる安全な居場所であるとともに、面接への行き来も含めてAが母親を独占できる時間としても機能するであろうと見立て、セラピーを開始した。

キーワード：共有体験、臨戦態勢、保障された居場所

「矛盾を抱えながらコミュニケーションする男性とのアセスメント過程」

熊谷迪也

本事例は、親しい人とうまくコミュニケーションがとれないことを主訴として来談した男性 B とのアセスメント過程である。B は面接の中で、婉曲的で遠回しに語る一方、断言的できつい口調になることもあった。また、話にまとまりがなく、やや一方的に話すこともあった。この時、Th は B の話の内容を整理できずに困惑し、B の発言に怯え、たじろいでいた。おそらく、この逆転移は B の成育歴に由来し、B のコミュニケーションを形成した一つと考えられる。また、話のまとまりのなさには、いまだに整理できていない B の感情が影響していると考えられる。B とのアセスメント過程を振り返り、Th と B との間で起こった関係性を整理し、検討したい。

キーワード：逆転移、威圧感、困惑

「枠を揺るがしてくる女性とのアセスメント過程」

遠藤真紀

本事例は、乳がんの手術によって片方の胸を全摘出してから不安が強くなった女性 C とのアセスメント過程である。C は面接をキャンセルすることがあり、その分の埋め合わせを求めることもあった。Th が設定を固守すると、それ以降、C は日時変更の要求をしなくなったが、面接時間の超過は続いた。C は乳がんの手術をする前に両親を立て続けに亡くし、住む場所さえ変えなければならず、C の喪失の大きさと孤独を思うと、時間になって終了することが C を放り出すことのように Th は感じていた。Th の逆転移と、C が枠を揺るがすことについて、どのように考えたらいいのか検討したい。

キーワード：喪失体験の受容、枠を揺るがすこと、逆転移

「自分だけのものが保持されない小学校低学年男児とのアセスメント過程」

山崎亮太

本事例は、感情のコントロールができないことを主訴とし、週 1 回の母子並行で行われた小学校低学年男児 D とのアセスメント過程である。面接中の D は、独り占めしたい欲求を表現していたが、一方でそれがいつも叶うわけではないことも分かっており、この葛藤が整理されないままになっているようであった。3 ヶ月が経過したものの、D や家族の都合により 5 回しかセッションを進められず、その度にセラピストは置いてきぼりになる体験をした。精神分析的設定があったことにより、逆転移に圧倒されることなく、セラピーが途切れそうになることと D が体験している不安定な世界との関連を検討することができた。

キーワード：振り回される体験、逆転移、不安定さ

「精神分析的な心理療法を書くこと、そして発表すること」

企画者 上田順一 (大倉山子ども心理相談室)
発表者 井元健太 (こころのドア船橋/カウンセリングオフィス SARA)
 人見健太郎 (みとカウンセリングルームどんぐり)
 吉沢伸一 (ファミリーメンタルクリニックまつたに)
指定討論 上田順一 (大倉山子ども心理相談室)

【企画趣旨】

「はじめにことばありき」という詩的表現は、これ以上置き換えられないことばによってその体験を綴っている。この表現のように、精神分析的な心理療法でのこころの体験もまた、置き換えられないことば、すなわち詩的表現で綴られていく。それは、精神分析的な心理療法の中心的課題が、こころの体験であり、情緒であるからだろう。こころの体験や情緒は、本来、そのようにあるもの、くらいにしか記述できないものであろう。それをあえて記述するならば、おそらくは、詩的表現を代用せざるを得ない。私たちは精神分析的な心理療法を実践する臨床家として、日々の実践の中でこれらの詩的表現を綴り、そしてある種の動機を携えてこれらの詩的表現を発表する。今回の分科会では、この詩的表現がどのように綴られるのか、そしてそれが発表されるとしたらその動機は果たして何に基づいているのかを探求してみたい。

「知ろうとすることをめぐる考察」

井元健太

私は患者について知らないことがたくさんある。私の事例報告は、私とその患者について知ろうとした限りのことである。だからそれは、その患者の報告であるだけでなく、私自身を提示している。私自身の内的課題と連動している。しかし、自己分析に患者を利用したのではない。あくまで患者を知ろうとした結果である。相手を知ろうとして自分を知り、自分を知ることによって相手を知る、という情動的関わり合いを生き抜いた。その証を残そうと思うときに発表するのだろう。そのように紡がれた言葉を他人事として読むならば、単なる「おはなし」以上のものにはならない。読者に求められるのは、その言葉を自分事として読み、自ら知ろうとする姿勢である。

キーワード : O、情動、知ること

「書くことの苦しみ」

人見健太郎

私は精神分析的心理療法で起きたことを書くことが苦手だし、苦しい。企画者であり指定討論者である上田は「詩的表現」という言葉を使っているが、長く交流している生きた事象を短時間、短い文章で記述する際の1つの側面を的確に述べていると思う。一方で、詩的であるということは、分析的な臨床空間で起きている生々しさの濃度を高め、何かを削ぎ落とす作業でもある。ここに葛藤が生じる。事例検討会でさえ単純な時間で言えば相当な圧縮を行うが、発表となれば尚更であり、患者あるいはマテリアルと距離が取れている必要がある。しかし、そこに入り込む余地のある偽り（一種の捏造）の問題はどうだろうか？こうした点を当日は話してみたい。

キーワード：書くことの苦しみ、詩的圧縮と削ぎ落とし、捏造

「書くことと生き残ること」

吉沢伸一

日々のセッションの記録、事例検討会、学会発表、論文執筆などで書くことは、その表現形は異なるものの、自らの経験を形にすることであり、私が分析的臨床家として生きていく上で必要不可欠な営為である。心理療法の実践は治療者が自らの心身を媒介とした情動接触をもとに考え続ける営みであるが、書くことは、そこにひとつのまとまり、つまりある物語を構築する試みである。「治療過程」と「書くことの過程」で共通しているのは、クライアントの物語れない物語に参加し生き残ることである。後者は前者を再体験することを含むが、私にとっては生きた証を見出すことであり、「治療過程」の中の分析的臨床家としての自分を越えていくことである。

キーワード：生き残ること、語られる物語、語られない物語

研究発表A	7月6日（土）13:30～16:00	F402教室
司会者 崔 炯仁（いわくら病院）		

研究発表①

「新人看護師に対するワークディスカッションの実践報告

－ 社会的防衛をワーク・スルーする －

発表者：山村 真（鈴鹿中央総合病院）

【発表抄録】

鈴木（2018）によれば、ワークディスカッションには「対人援助職の継続的職業研修」と「組織コンサルテーション」の2つの側面がある。後者の「組織コンサルテーション」の方法論としてワークディスカッションを試みたとき、Isabel Menzies Lyth（1960）のいう社会的防衛 *social defences* がグループの進展を阻む障害として必ず立ち現われてくるであろうし、この社会的防衛からグループをいかに保護するかということが一つの大きなテーマとなるように思われる。

本発表で私は、総合病院での新人看護師を対象としたワークディスカッションの実践を報告する。私の勤務する病院では看護師の離職者が相次ぎ、看護部からの要請に応じて、私は入職一年目の看護師に対してワークディスカッションを導入することにした。セッションが始まると参加者は一様に下を向いて黙っており、リーダーである私からの指示を待っていた。実際の業務では看護師一人ひとりの裁量が奪われており、参加者はそのような状況に疑問を抱きながらも甘んじているようだった。先輩看護師の指示に盲従することで、業務上の責任を回避し、また患者との情緒的な接触に伴うインパクトから自分たちを防衛しているようだった。このような没個性的な「集塊 *agglomeration*」と化す社会的防衛のスタイルが参加者の間で支配的であった。しかしこのことを解釈していくことで、少しずつ自由なディスカッションが可能となり、また業務に伴う情緒に触れていくことができるようになった。それは参加者が社会的防衛と折り合っていくプロセスでもあったと考えられる。

ところが終盤にさしかかると、グループは不安を否認するかのようになり、みずから積極的に社会的防衛へと同一化していった。鈴木は、職場でワークディスカッションを行う際には日常と非日常とを隔てる「中間領域」が不在となり、社会的防衛によってグループ内部の「ここを考えるスペース」が浸食されやすいことを指摘している。本発表における実践は、私自身が正職員として勤務する職場であり、参加者にとって私はリーダーであると同時に通常業務で顔を合わせる機会のあるスタッフの一員でもあった。このような多重関係が、グループのプロセスにおいて社会的防衛の影響を促進し、リーダーである私を社会的防衛の体現者とみなす転移状況を強化したと考えられる。

キーワード：ワークディスカッション、社会的防衛、集塊

研究発表A	7月6日（土）13:30～16:00	F402教室
司会者 崔 炯仁（いわくら病院）		

研究発表②

「集団療法の中でスタッフがコンテイナーとして機能することとその困難性」

発表者：作井浩美（医療法人社団慶神会 武田病院）

【発表抄録】

私が勤務してきたデイケアやリワークプログラムは、グループ活動を中心とした集団療法であった。その中で集団の面白さや大切さと同時に、集団ならではの難しさを感じることも多かった。

デイケアやリワークプログラムは、社会という集団の中で躓きを体験した人達が、社会復帰を目指す場であり、私達スタッフはそれを支援することになる。そのためデイケアやリワークプログラムの集団療法の場合は社会の縮図のようになり、メンバーはそこで様々な情緒を感じ、様々な体験をする。スタッフもその集団の一員として活動することで、体験をメンバーと共有しやすいというメリットがある一方で、集団の一員であることが支援を難しくする面があると感じている。

私は精神力動的な理解が、集団療法の中でも有用であると考えているが、個人心理療法に比べ、一度に色々な事が起きてくるため、その力動を丁寧に理解するということが難しく、無力感を覚えることも多い。また日々の業務に追われ精神的な余裕がなくなるため、毎日を平穩に何事もなく終わらせることが最善であるかのようになり、意識せぬ間にメンバーと向き合うことを回避したり、またトラブルが起きないようにメンバーの言動を統制していたりすることがある。それではメンバーが社会の中で体験してきたことを反復してしまうことになりかねないということは、一步集団から離れると理解できるものの、集団の中にいると見えなくなりやすい。そこにはBion(1961)のいう基底的思想が影響していると考えられ、スタッフ側の情緒によってメンバーとの関わりが難しくなることは集団療法の中では起こりやすいことであると考えられる。

しかし、職場や学校などの集団に適応できずに離脱してきたメンバーにとって、集団療法の中で新しい体験を積むことは、再度社会に出ていく上で非常に意味のあることだろう。そのためにはメンバーが受け入れられずに投げ込んでくる彼らのこころの一部をこちらが受け取り、考えて伝え返していく、コンテイナーとしての機能が大きな役割を果たす。

そこで今回は、集団療法の中でメンバーと関わるのが困難になることと、その中でスタッフがコンテイナーとして機能することの意義について事例を交えながら考えたい。

キーワード：復職支援、集団力動、コンテイナー

研究発表A	7月6日(土) 13:30~16:00	F402教室
司会者 崔 炯仁 (いわくら病院)		

研究発表③

「**Reflective Parenting** メンタライゼーションを生かした子育て支援」

発表者：ガヴィニオ重利子 (Child-Parent Counselling)

【発表抄録】

発表ではまず、早期の母子関係についてこれまでも広く議論されてきた概念（母親の原初的没頭、スパイラル相互作用 *Spirale interactionnelle*、母親の愛着表象、投影、投影同一視）を取り上げながら親子の相互コミュニケーション発達について振り返り、そのような関係性に意識を向けた子育て支援のあり方として**Reflective Parenting** (Cooper & Redfern 2016)を提案してみたい。

取り上げる精神分析的な母子関係の概念はいずれも、親子の間で起こる無意識の過程を議論するものである。つまり、親子関係の構築はお世話や教育といった親から子への意識的活動だけでなく、そこに展開される無意識の交流にもまた、大きな影響を受けるということをも主張するものである。そのような無意識の交流に注意を向け、それが親子関係そして子どもの成長に与えるインパクトに注目したのが**Reflective parenting**である。

実際の介入は主に、**Parent Map**と呼ばれる親の自己観察を促すものと**Parent APP** (**Attention** 親の子ども観察/ **Perspective taking** 子どもから見た世界への理解/ **Providing empathy** 親から子への共感)を促す関わりから成り、そこで活用されるのは、親の**reflective function**=メンタライジングの力（自身そして他者の考え、信念、願望や感情を理解しようとする精神活動）である。そのような力の強化あるいは回復は、親自身の子育て体験を支援するだけでなく、子どもの情緒的発達にも支援的である。事例を提示しながら、そのような親支援の有用性と実際を議論してみたい。

キーワード：Reflective Parenting、メンタライゼーション、母子相互コミュニケーション

研究発表B	7月6日(土) 13:30~16:00	F404教室
司会者 上田順一(大倉山子ども心理相談室)		

研究発表④

「非行・犯罪事例における精神分析的心理療法」

発表者：中村大輔(神戸臨床心理カウンセリングルーム 研心音)

【発表抄録】

本発表では、非行・犯罪における精神分析的な心理療法の実践事例を通して、変化に対する抵抗や動機付け、葛藤時における対決的な自我の役割などを検討し、どのような心理に基づいて再犯を起し、どのような変化によって再犯が防がれているのかについて、力動的に考察をしていく。

現在、非行・犯罪の再犯防止の取り組みは、様々な矯正施設で行われており、時間や回数を設定し、構造的な枠組みの中で実施されていることが多い。その多くは認知行動療法に基づいた小集団形式で行われている。こうした取り組みの成果は再犯率という数値化された形で知ることができるが、個々の事例を縦断的に深く掘り下げて検討する機会は多くはない。

当機関では、司法矯正施設と連携を取りながら、窃盗事件や性犯罪、傷害事件など数々の事件の分析及び鑑定、再犯防止を目的とした心理療法を行っている。時には夜間に「襲いたくなった」「死にたい」「解雇されて自暴自棄になった」といった内容で本人から連絡が入り、救急面接に迫られることもある。実生活の中で、これまで孤立してきた加害者が破壊の衝動にかられ、面接者に指示を仰ごうとするのは、再犯防止プログラムや認知行動療法といった構造的な関わりではなく、関係性の中に救いを見出していこうとしているといえる。

フロイトは、覗く欲動である窃視欲と覗かれる欲動である露出欲や、フェティシズムといった性倒錯の概念を提起しており、現代は文化的に許容されるものもあるが、性犯罪を理解する上でも意義のある概念を提起している。フェティシズムや儀式的行為が、窃盗や盗撮といった他者の領域を侵食してしまう事例では、加害者にとって崇拜物は他者が理解できないような特別な意味を帯びており、対話を通じた関わりだけではなく、面接者に崇拜物を預けて浄化させようとする行動も見られる。

本発表では、窃盗、露出、盗撮、強制わいせつ、傷害、ストーカーといった複数の実際にあった事件事例と精神分析学の視点を関連付けて考察し、心理療法の導入前と導入後のロールシャッハテストの反応なども紹介しながら考察を深めていきたい。

キーワード：非行犯罪、フェティシズム、力動的考察

研究発表B	7月6日（土）13:30～16:00	F404教室
司会者 上田順一（大倉山子ども心理相談室）		

研究発表⑤

「NOと言える自分に出会うまで」

発表者：東海林則子（公立学校スクールカウンセラー）

【発表抄録】

中学校のスクールカウンセラーとして仕事をする中で、いちばん多い相談は不登校や登校しぶりに関するものである。長期間の不登校になると生徒本人と面談することは難しく、主に保護者の方とお会いすることになるが、学校を休みがち、登校をしぶりがちな生徒とは直接面談することが可能である。登校が滞りがちになる要因には、いじめ、人間関係のもつれ、心身の不調、障害特性による不適応、怠学、家庭環境に起因するものなど様々なものが考えられる。

中学生は青年期前期の発達課題を抱えており、自我同一性の確立のために試行錯誤を繰り返す時期である。この時期は、自我意識の高まりとともに関心が自分自身の内面へと向かう。また、他者と自分を比べて劣等感を感じたり、周囲から自分がどう見られているかということに敏感になる。それが思わしくない場合には大きく落胆し、そのことが仲間関係から撤退するきっかけになることもある。中学校時代は、いろいろなことに挑戦し、時には失敗しながらも自分らしさを作り上げていくスタート地点であると言えるが、敏感さゆえに過度に臆病になることもある。また、理想が高すぎたり、周囲からの期待が大きすぎたり、あるいは失敗や喪失体験が重なると自分らしさの確立が揺らぎ、不安定なころのまま不安を抱えながら生活していくことになる。

いつも周囲からの評価を気にして自分の意見を言えず、「本当の自分」と「まわりから期待されている自分」との間に葛藤を感じ、心身のバランスを崩していた生徒が“NO”と自己主張できるようになるまでの経過を報告する。学校生活の中でストレスを感じていた活動への不参加を表明できずに、欠席という形でそこから逃げていた生徒が、それまで言えなかった言葉を口にすることは勇気のいることであり大きな不安を伴うものであった。結果的に自分の意見が通らなくても自分の気持ちを言えた時、ころは成長し、新たな一歩を踏み出すことができた。

学校での心理支援において、スクールカウンセラーの役割は、生徒たちの精神的な成長に寄り添うことであると思う。生徒の感じている困難を教員とは異なる目線で見ること、そこで起きていることや環境との関係を分析し、それを生徒たちに返していくことが大切であると考えられる。

参考文献：「学校臨床に役立つ精神分析」平井正三、上田順一編 誠信書房 2016

キーワード：青年期前期 「NO」ということ 学校での心理支援

研究発表B	7月6日（土）13:30～16:00	F404教室
司会者 上田順一（大倉山子ども心理相談室）		

研究発表⑥

「外骨格の視点による地域支援者との連携について

－成人のASD患者との心理療法事例から－

発表者：田村雄志（こもれび心の診療所、佐野厚生総合病院）

【発表抄録】

医療や福祉のサポートを受けながら地域生活を送る成人の発達障害患者のなかには、時に地域において社会的な適応に問題を生じ、また時に地域コミュニティの中で問題事例化して、行政や福祉サービスの相談支援者を通じて医療機関への相談、連携がはかれるケースは少なくない。また、そうした問題をきっかけとして医療機関の心理職に患者との心理検査や心理療法、支援者のコンサルテーション依頼がなされる事も多い。

演者は総合病院精神科、精神科クリニックに心理職として勤務し、このような地域コミュニティの相談支援者からの連携依頼に応える際、患者本人のみならず支援者側のニーズを想定し、可能な限り担当者と直接連絡や面談を行うなどして、依頼となった背景の理解に努めるようにしている。いわば、患者に関わる人のニーズを汲んだ心理支援・介入である。

一方、そうして寄せられる支援者のニーズには、医療機関または心理職への過度の理想化や様々な投影が含まれる場合もあり、支援者コミュニティにどのようなことが生じて依頼に至っているのか、という支援者集団の力動的背景を理解すること、ニーズそのものの力動的理解が重要となる。また、一見すると支援者側の困りごととみなされている患者の問題行動であっても、一方ではそれが患者側からの援助要請やコンテインメント不足を伝えるメッセージである場合もある。

しかし、独特なこだわりをもち、周囲に受け入れがたい言動や行動が目立ってしまう患者においては、コミュニティにとっての困った人物として患者中心の理解がなされにくく、問題行動の抑え込みばかりに支援者の目が向いてしまい、問題が悪化してしまうケースもある。このようなケースでは、地域の支援ネットワークが患者をよりよく理解し必要な支援を行えるように、医療機関での関わりで得られた力動的視点での患者理解を伝えることが有用であると考えられる。

Lucas（2009）は、統合失調症患者の脆い外骨格をサポートするために、力動的背景を基にした患者のニーズ理解と保護的支援環境の構築が重要であることを述べているが、同様の視点は成人の発達障害患者の支援においても、特に地域のなかの問題事例の理解をする際に役に立つと思われる。本発表では、演者が心理療法と地域支援者との連携を行なった40歳代ASD患者との事例をもとに考察したい。

【文献】 Lucas, R. (2009) Psychotic Wavelength. Routledge.

キーワード：外骨格、ASD、地域連携

研究発表C	7月6日(土) 16:30~19:00	F404教室
司会者 塩飽耕規(医療法人遊心会 にじクリニック)		

研究発表⑦

「身体と生の感情の乱調—ラカンにおける理論とその変遷—」

発表者：河野一紀(龍谷大学)

【発表抄録】

精神分析は、自らを示す名にもかかわらず、その実践の中心には身体の間いが位置づけられる。ヒステリー者の身体にあらわれる転換症状から明らかになったのは、言語による働きかけが、言語ならざるものであるはずの身体に多大な影響を及ぼすということであった。ここからフロイトは、我々が話す語から成り立っている心的なものとして無意識についての仮説を立て、言語は無意識を介して人間の身体へと干渉すると考えた。

ここで問題となる身体とは、言語のなかに棲まう身体であるだけでなく、言語がそこへと棲まう身体でもある。そうした身体は、生きたもの *vivant* としての人間と言語との出会いからかたちづくられるとラカンは考えた。つまり、それは生まれながらにして所与のものではなく、その限りにおいて、我々は身体であるのではなく、身体を何らかのかたちで持つようになるのである。だが、精神病者や自閉症者に時に認められる身体イメージの脆さや不安定さがあらわすように、身体の所有を実感し、確信することそれ自体に困難が生じるケースも少なくない。そのような事態を、症例シュレーバーを論じるなかでラカンは「主体における生の感情の最も内奥の接点で生じた乱調」(E, p.558)と表現している。

シュレーバーは『回想録』において、男としての身体の破壊・解体と「神の女」としての復活による世界秩序の回復について書き記した。そこに認められる自らの真理の追求に対する驚くべき真摯さは、「世界全体にかかわる贖罪という未来のモチーフ」(E, p.564)という妄想の主題とともに、この症例の並外れた性質を特徴づけている。シュレーバーにおける身体の攪乱は、父性隠喩の欠陥、すなわち父の名の排除(父のシニフィアンの欠落 P0)の帰結としてのファルスのシニフィカシオンの欠落 Φ0 に由来し、妄想によるその安定化は、鏡像段階論にも通じる、イメージへの同一化による同一性の再建、自我の水準での補填というかたちでラカンは理論化した。

他方、ラカンは後年、父性機能の概念的更新とともに、同一化による自我の再建とは別のかたちで、身体をめぐる乱調とそれに対する主体的応答の在り方を構想した。本発表では、『サントーム』での症例ジョイスと、サントヌ病院の病者提示での症例 B 嬢に言及しつつ、主体と身体との関係を静的な所有にとどまらない、身体の使用/活用というプラグマティックな視点から検討したい。

キーワード：身体、同一化、父性機能

研究発表C	7月6日(土) 16:30~19:00	F404教室
司会者 塩飽耕規(医療法人遊心会 にじクリニック)		

研究発表⑧

「解釈の生成における治療者の無意識のはたらき」

発表者：若佐美奈子(神戸女学院大学/西天満心理療法オフィス)

【発表抄録】

私たち治療者は、精神分析的な心理臨床において解釈を生成する際、自身のこころの意識と無意識を用いるが、無意識がそれに果たす役割について議論するのはとりわけ難しい。治療者個人の無意識の問題を公開で扱う困難が当然生じる上に、治療者の意識を介した報告では、無意識のはたらきに関する厳密な証左とならないからである。したがって、1セッション中およびその後の経過で、治療者の解釈が、患者の連想や遊びを促進し、考えを拡大・深化させているかを詳細に検討する必要があるだろう。

一方、Bion にならって解釈を授乳に例えるなら、治療者-母親は、解釈-母乳を患者-赤ん坊に与えると体験しているかもしれないが、そもそも母乳は母親の所有物ではなく、赤ん坊が泣き乳首を吸うことに対応して母子の関係性で生まれてくるものである。よって、母乳-解釈の生成は、赤ん坊-患者の要求や気持ちを受け止めて理解する母親の「意識」のみならず、赤ん坊-患者のアクションに連動して母親-治療者のこころが動き出すこと抜きには成り立ち得ない。それはいわゆる逆転移と定義されるものより、さらに深く広い範囲の現象を指しているように発表者には思われる。すなわち、母親-治療者が、普段何を栄養としどう生きているか、また家・父親-治療構造・文化とどう関係しているか、どう生きているかがその現象に決定的に関与している。

一般的に、個人分析によって、治療者の個人的逆転移と患者によって喚起された逆転移の複雑な絡み合いを仕分ける道が拓けると言われるが、言うまでもなく個人分析を受ければ自動的に無意識の問題が解決するわけではない。臨床場面の一瞬一瞬で、治療者の無意識が解釈生成にどのように寄与しているかを綿密に議論する必要があり、それは精神分析だけでなく、精神分析的な心理療法においても同じである。

本発表では、50代女性の事例(隔週、自費対面法、主訴：重要な対象喪失とそれに対する罪悪感)の1セッションを取り上げ、治療者の各々の解釈についてその生成の意識的側面を提示した後、その後の治療プロセスを参照しながら、治療者の無意識が解釈に及ぼした影響について討議する。

キーワード：治療者の無意識、解釈、転移-逆転移